

2006 年度 川と山のぎふ自然体験活動の集い

目的

2004年度から始めたこの集いも今年で3回目になります。当初は県内の自然体験活動を行なう団体や指導者が一堂に集い相互の交流を図ることに主眼を置いていましたが、今回はそれにとどまらず、岐阜県の自然体験活動の新たな方向性を模索することと、次世代を担う高校生や大学生等にまで広く門戸を開き岐阜県の自然体験活動の底辺を広げることがを目的にしました。また、今回は岐阜県の豊かな自然資産を活用することを念頭に置き、郡上八幡というフィールドの特性を生かすプログラムも多く取り入れています。

主 催 川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会
後 援 岐阜県教育委員会，郡上市教育委員会，特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会
協 力 郡上八幡 自然園

日 時 9月9日（土）10：00～10日（日）15：00
場 所 郡上八幡自然園 〒501-4238 岐阜県郡上市八幡町島 757 番地

参加料 1,000 円

食費・宿泊費 4,000 円

(9日昼食 500 円、夕食 1,000 円、宿泊費 1,500 円、10日朝食 500 円、昼食 500 円)

日 程 別紙日程表

川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会

川尻 秀樹（森林インストラクター岐阜）
北川 健司（特定非営利活動法人エヌエスネット）
柴田 甫彦（特定非営利活動法人長良川環境レンジャー協会）
高田 研（岐阜県立森林文化アカデミー）
佃 正壽（森林たくみ塾）
中澤 朋代（自然体験活動指導者トレーナー）
三浦 嘉門（特定非営利活動法人メタセコイアの森の仲間たち）
三島 真（山と川の学校）
八尾 哲史（岐阜県立森林文化アカデミー）
(アイウエオ順)

日程表

日付	時間						備考	
9日 (土)	9:30	受付開始						
	10:00	開会式（今回の主旨説明） オリエンテーション						
	10:30	シンポジウム「もっとつながろう、岐阜県の自然体験活動」岐阜県の自然体験の つながり拡がりに向けて」						
	12:00	昼食						
	13:00	セッション1 『岐阜県の教育 旅行』	セッション2 『自然と人を つなぐ仕事・ ハローネイチ ャーワーク』	セッション3 『地域の自然 を生かした食 育』	セッション4 『森作り体験』	★体験1 『カヌー体験』 同じプログラ ムを2回実施	★雨天 の場 合 は『ケイ ピング』 に変更	
	17:00	入 浴（自由時間）						
	18:00	夕 食・交流会1（司会 加藤 春喜）						
19:30	『交流会第2 部』	夜の体験2 『ハザコ観察』	夜の体験3 『火振り漁』 （担当 三浦）	★当日も郡上踊りが実施され ます。参加希望者にはご案内 します。				
10日 (日)	8:00	朝 食						
	9:00	セッション5 『子育てと自 然体験』	セッション6 『グリーンツ リズム』	セッション7 『森のインター プリテーショ ン』	セッション8 『ものづくり商 店街』	★体験1 『カヌー体験』	★雨天 の場 合 は『ケイ ピング』 に変更	
	12:00	昼食						
	13:00	全体会						
	14:00	司会 高田 研（岐阜県立森林文化アカデミー） 閉会式						
	15:00	解散						

9月9日（1日目）

【シンポジウム】 10:25～12:00

タイトル：「もっとつながろう、岐阜県の実験活動」

～岐阜県の実験活動のつながり、広がりに向けて～

司会 高田研（岐阜県立森林文化アカデミー）

パネリスト 小坂伸一（株式会社中部キャラバン 顧問）

佐藤初男（実験活動推進協議会（CONE） 副理事長）

北川健司（アウトドアサポートシステム 代表）

郷泰彦（岐阜県総合企画部情報企画課地域情報化担当）



<内容>

高田 この集まりも3回目となり、そろそろ具体的にネットワークが動く方向に持っていこうという目的がある。どのようにしたらよいか、パネラーから情報をもらう。

まずは全国登録組織CONEの紹介を佐藤さんをお願いします。

佐藤 CONEの登録をしている方手を上げてください。ワーいっぱいいるな。知っている人もしばしお付き合いください。CONEは2000年に発足、指導者の登録と活用を何とかできないか、と1999年1月に60以上の団体が集まり、がやがやはじめた。

日本にはJEEF（社団法人日本環境教育フォーラム）、JON（日本アウトドアネットワーク）、CONE（NPO法人実験活動推進協議会）などネットワークがある。たくさんさんのネットワークがあるが、ネットワークのメリットは同業他社との情報交換ができることや共同で保険に加入したり1社でできないことを共にできること。CONEは最初で最後の巨大なネットワーク団体と思っている。

<以下、CONEをスライドで紹介>

247団体が加盟している（プロもアマチュアも）

1999年初会合、2000年設立総会

2002年NPO法人格取得、2006年設立5周年

実験憲章（5条からなる）を策定。

業務内容は指導者養成、指導者活用、調査研究

CONEフォーラムという集まりを地域主導で行っている

合同見本市の開催

…アウトドアフェスティバル、ウィンターリゾート、エコプロダクツ等

5 省庁と情報交換し、指導者養成をしている

…全国土地改良事業団体連合会

河川整備基金助成事業・RAC（川に学ぶ体験活動協議会）

安全に関する人材育成・環境省、

青少年の都市と農山漁村の交流活動推進に関する調査研究・文科省、

青少年の自立支援事業地域連携のためのコアリーダーの育成・文科省、

CONE スキルアップセミナー（年2回開催）

自然体験活動推進議員連盟 超党派の議員連盟・推進法を作る方向で

高田 ありがとうございました。質問があれば…ここで質問するのは難しいですね（笑）

次は中部キャラバンの顧問でいらっしゃる小板さんをお願いします。自然体験学校をやっている方と、現場を結ぶという視点からお願いします。

小板 はじめに会社の概要を。創立 54 年、本社は名古屋、椋山女学院大学に支店あり。私学の取り扱いが多い。昔は岐阜県の高등학교の取り扱いも多かった。JTB などや道路の時刻表にも中部キャラバンの名前は出ている。今回参加させていただいたのは、この会場である自然園を利用しているため。今までの中で5年間くらいこちらでの自然体験がなくなった時期があった。奈川村など浮気をした時期もあったが、その後こちらの施設整備（風呂・食堂など）が進み、また再び利用させていただいている。

僕らは休日に現場を見に行って、自分の足で見つけた場所をコーディネートしている。私たちの仕事は学校さんと自然体験を提供するところをつなぐ役割。気をかけていただいて、一緒にやっている。

北川 年間 100 日は現場。中心は長良川でラフティング、カヤック、パラグライダーなどをやっている。自分のところでパンフレットを作り、顧客を集めている。夏がイチバン忙しい。

最近は教育旅行をやり始めた。年間を通じてやっていかないと生きていけないことも理由のひとつ。冬の自然体験は標高 1500m が安定しているので、冬のプログラムもある。春・秋に教育旅行を受け入れているが、人数が多いため、機材・人材など、過剰投資になったりするのをうまくやりくりするのが秘訣。ネットワーク業者間で資材や人の助っ人をしているが、クオリティの高さを保つよう工夫している。

岐阜は自然資源が豊かなのに、ほかの地域に負けている。岐阜県はまだネットワークや情報交換ができておらず、近くのをライバルと見る傾向がある。ライバルは他県にあり、地方に現場があるので、岐阜県の中のことをきちんとやっていけないかと考えている。一ガイドとしてやっている、地域起こしとしてやっている、自分のライフワークとしてやっているなど、様々な人がいるが、すべて岐阜県の魅力だと思っている。30~40 人くらいのプログラムができる人は、団体の一部を担当してくれるような感覚で、一緒にできればいい。同じようなことをやっている団体があれば、一緒にやれば大きな受け入れができる。

東京では電車で移動し、公園でプログラムをするときに 10 回ぐらい点呼を取りトイレに行かせるのをみて、うまくシステムができていると気づいた。全く自分たちと違うことをや

っている団体について勉強することも大事だと思う。もっと知り合えて、気軽に情報交換できれば、岐阜県の魅力が分かれば、広がっていくと思う。

こうした顔の通じた関係に加え、そこに集まった情報をポータルサイトで発信できればと思う。岐阜県はこんなにまとまっています、たくさんの方に来ていただけますという発信をしていくといいと思う。森林、自然体験、グリーンツーリズムも見な同じカテゴリだと思っている。こんなことが僕の企み。

高田 今日の方科会はこんなことを念頭に進めていただければ。

県のポータルサイトが作られている。担当の郷さんお願いします。

郷 良い場をいただき、ありがとうございます。私は県の情報公開ポータルサイトの担当をさせていただいている。私たちがどのように支援できるか、二つ紹介。

<以下、スライドを使って紹介>

●岐阜県のサイト「ぎふポータル」とは？

県の情報をたくさん出している。ほかに市町村、企業など地域の情報を掲載していく。左側には岐阜に住む人のための情報、県外の方のための情報、行政のサポート情報、と分けており、分かりやすさを心がける。サイト数 11 万ページ、月間 300 万件以上のアクセス。行政情報、観光情報、県産品の情報、ショッピングにもつなげている。

今回こういう話をいただき、調べたこと。検索エンジンからどのようにぎふポータルにきているか調べたら、ぎふポータルから直接来る人と、コンテンツ（郡上園など）をキーワード検索してぎふポータルに来る人もいる。キーワードで検索されるため、団体同士のつながりを深めていけたら。

●電子コミュニティとは？

自治体など地域のための活動をやっている人に、インターネットでの

1、非公開ページ メンバーの打ち合わせのための機能、パスワードで入り、メンバーだけで情報交換する。

2、情報発信ページ 募集要項の掲載など本来のホームページの役割。

なるべく簡単に操作、無料で利用できるようになっている。まだ利用団体は 20 弱で少ない。ぜひ使ってください。（使い方の具体例をスライドで紹介）

●どんな風に使うの？

公開情報（ホームページが作れる）をつくるやり方は画面の空欄に必要事項を記入するだけ。非公開ページは、情報書き込みの欄や、自由に書ける掲示板が用意されている。また、イベント案内はカレンダー形式になっており、所定のフォームに必要事項を書き込むとカレンダーに行事がアップされる仕組み。

インターネットで直接申し込みができる機能もあり、見た人がその場で申し込みできる。また、Web マップでは、子育てマップ（子育てに関連した施設）、安全マップ（痴漢・不審者情報）などがあるので、多くの方に使っていただきたい。利用はNPO法人、または自治会・ボランティアなど地域組織であれば利用可能。手続きは申込用紙でできる。

高田 質問は？

会場 どんな人が使えるのか？ 岐阜在住など限定があるか？

郷 県の情報なので、地域のために岐阜に関係のある団体なら OK。

会場 民間企業が利用はできるのか？

郷 今のところ、純粋な民間企業は想定していない。ここにお問い合わせいただければ、話を聞いて対応したい。

会場 リンクを張るには申請が必要か？

郷 それぞれのページからのリンク設定は自由。県のページからも申請時に登録させていただくことができる。

高田 どうもありがとうございました。

日本中を飛び回る佐藤さんはデジタルが嫌いで、最近まで携帯メールもできなかった。この活動している人はアナログが多いかもしれませんが・・・(笑)。

小板さんも足で歩いて情報を集めるということですが、ちょっと情報の集め方についてお話していただければと思います。

小板 若い人はインターネットでやるけど、私は古いもので、自分で食べたり、見たり、体験して確かめないと信用できないしお客さんに勧められない。休みの日にそこに行って見に行くのは大事だと思っている。若い人は僕のことを遊びに行っているだけというかもしれないけれども、自分で見ないとお客さんへの訴えが鈍いような気がする。愚痴みたいに聞こえますが、自分でやらないと気がすまないのかも。子供の頃から転校が多かったこともあるし、自分が納得できるものをお客さんに出したいというこだわりがある。これまで 40 年、それでやってきた。

青年の家にもだいぶ行った、岐阜県の青年の家は厳しく、酒タバコは一切禁止。一番厳しかったのは江田島でその次が乗鞍。厳しいところも、魅力をきちんと説明し、理解してもらえれば利用していただける。

山村の小中学校の廃校の跡に行って開拓したこともある。そうした足で探した情報を、学校に伝える。急には進まないのも、お金のこと、村の受け入れの具合など少しづつ調整して旅行企画をつくっていったこともある。

5 年前まで私たちは 100% 学校の教育旅行だったが、最近は修学旅行なども海外に行くことが増えたので、社内でも特販といってオーストラリア、中国などの海外旅行も扱っている(95% が学校で、5 % が海外)。また、一般企業相手の海外・国内での研修旅行なども取り扱っている。

高田 ありがとうございました。乗鞍青年の家は今でもタバコはすべて禁止らしいが、ずいぶんとやわらかくなってきた。

岐阜県はずいぶんデジタル化に力を入れている。全国でもこうした取り組みは少ない。でも、ここにお座りの皆さんは、非常にアナログで、手で触り自分で確かめることを仕事にしている方が多いと思うが。私たちはデジタルとアナログの両方で生活していて、どのように

つなげていくか、が課題。

高田 行政と一緒に進める、企業と一緒に進める、など増えてきていて、異業種との提携が始まっている。今まで接していない人たちとスクラムを組んでやっていく、ワーキングネット作らないと次の時代は乗り越えられないだろう、という気がする。

佐藤 そうですね、昨年9月から千葉自然学校は40団体をネットワーク化して、「千葉自然学校」というブランドで各地に営業に行っている。背景には県知事の関心事である「房総半島をいかに活性化するか」という視点がある。自然体験のあらゆる分野をネットワーク化して一般の方に千葉の魅力を表わしていくことに取り組んでいる。昨年9月に指定管理者制度のコンペで「千葉自然学校」が入札し、市とともに運営している。白川郷でもトヨタ自動車と自然学校が組んでやっている。今は連携なくしてはやっていけない。

千葉自然学校もオールジャパンからスタッフを集めて運営、非常に評価をいただいている。PFI方式で行政は公共事業を民間に流している。専門を特化する人々が分野（建設会社なども）を分け合い、ともに進めていくと、学ぶことや刺激が非常に多い。指定管理を取れば20年や25年間、その運営ができる。つながって損はない。

実際に地域でなにかやっといこうとすれば、人間関係やなんかの拒絶反応も多いし、利権問題も出てくるなどめんどうなこともあるが、そうしたことを乗り越えていけば、新しいものを構築できる。

高田 質問どうですか？

会場 指定管理者の問題があると思う。人件費の削減が行政の目的に見えて、管理費が少ないことが多いので、行政の理解が充分か、利権やなんかでこちらの理念がずれていくということはないのか？

佐藤 管理をするだけならその質問についての課題はないが、プールの安全指導などは行政にとって信頼できるNPOがない、という足踏み状態がある。私の読みでは3分の1は閉鎖、3分の1は民間運営、3分の1は直営になるだろう。請負後3～5年に評価されるが、評価に耐えうる民間があるか？が課題。

受け入れ人数で評価するのではなく、質で評価できる・教育的評価ができるしくみになりえていないのも課題。ここは行政と話をしながらしたい。

手を上げているソフト会社が実はない。ビルメンテナンス会社は管理でたくさん手を上げている。そうしたところと自然体験提供者がつながるのはひとつの手。

高田 午後から小林毅さん（森林文化アカデミー教員、元自然教育研究センター代表）が来るが、彼もこの評価の方法について研究している。

会場 北海道の環境教育学会で、評価についての分科会（「自然ふれあい施設の評価」分科会）が持たれていた。小林毅さん、小河原さん（生態教育センター理事長）、渋谷さん（環境省）など出席。なにかしらの基準を示す必要がある。一番分かりやすいのは数だが。（評価そのものを）NPOや民間でやるのが良いと思う。分科会の中では裏舞台の話が聞かれ、評価方法を都合によって代える傾向も否めない。公的な機関やCONEなどで物差しを作らないと、

議論もできない。

高田 今、国もやっているところ。ネットワークはものさし作りにも役立つ。

高田 もう少し岐阜の話もしていきたい、北川さんどうぞ。

北川 午後にセッションが持たれるので、特化した形でそれぞれ関わっていただければ。僕らとしてはもっと知り合って、どのように動くか、というのを話してもらいたい。長い時間ざっくばらんに話すものがないような気がする。

一番の目的は交流。そしてもう一歩進めていただきたいのは、僕らのほうから言って引張っていくより、ミーティングの中からワークグループが出てきてできればいいと思う。例えば、会費を払ってでもポータルサイトを作ろう、という動きが会員の中にあってもいいと思っている。受益者負担でもいいから、みんなでページを作ってしまいたい。とにかく手を上げて欲しい。僕がやっていきたいポータルサイトでは、一緒に仕事をしていきたいという人を探したい。

高田 3年前に富良野をエコミュージアム化するという話の司会をしたことがある。3回しか会議していないのに、2回目でこうしたことがやりたいという意見が出て、言ったら責任取れという感じがある。最後の3回目では「やります」宣言。そこで生まれたもの。ひとつは景観形成事業を受託するNPOを作った。もうひとつは事業者間のネットワークNPOをつくった。実際に今活動中。3つ目はFM富良野を作った。その後で見に行ったら、ちゃんとやっている。行政のお金は使っていない、みんなボランティアでやっている。本当に作っちゃった。

行政の人は市民参加で何ができるかを勉強していた。街づくり条例の中で。

会場 受益者負担が成り立っている団体だけでもポータルサイトを作りたい、という話があったが、県の施設でも指定管理制度になっても受益者負担に移行するのに困っている。ポイントを教えて欲しい。

北川 収入を得ているところは会費払えるだろうという意味での発言、ボランティア団体では資金繰りが苦しいだろうから。受益者負担については、自分たちは付加価値がある商品を作って売っている。行政ではどうなるかは分からないけど。

佐藤 行政の場合は、県がお金とってもOKといってくれるかどうか。指定管理者の中には管理料が少ないけど、自分で儲けていいよ、というところもある。そろそろ行政と民間の仕事の役割分担をしてもいい時期。ぜひ、直営の施設も残して欲しい、税金を使ってでも教育はやるべき、と主張したい。住み分け、競争をしながらやっていくことが大事。

ニーズがなければ良い商品でも売れず成り立たない。国際自然大学校をはじめたころは「子供からお金を取るなんて」とともいわれたが、サービスを積み重ねてやってきた。民と官のバランスも大事。地方とは経済格差があることは事実で、20年かかるかもしれないががんばって欲しい。

高田 そろそろ時間になりました。

【1日目分科会】13:00～17:00

●「SS1 教育旅行情報のポータルサイトづくり」(報告：北川)

- ・参加者 23 名。受入サイド、旅行業界、学校の先生、行政の方などをとりまく面々がバランスよく参加してくれた。
- ・最初に、学校の教育旅行の現状や国の方向性などについての事例報告があった。「総合的な学習の時間」などは縮小傾向にあるが、「ひきこもり」「ニート対策」などが新しく取り入れられるだろう、ということだった。
- ・ポータルサイトはブログ感覚で活用できるホームページ。利用しているのは、現在わずか 20 団体なので、もっと利用してほしい。
- ・どういう情報を発信するか？ 本物志向化、といわれるが本物とはなにか？ 発信するためにはどういう情報が必要か？ についてブレインストーミングを行った。



- ・各ゲストから出されたメッセージ

○森本さん(近畿日本ツーリスト)

- ・子どもの素顔が見られる
- ・自然体験活動とつなぐ旅行会社
- ・沖縄への教育旅行でよくやられる黒糖づくり。以前は代表の生徒が液を煮詰めたもののかきまぜるだけだったが、最近は、全員がさとうきび畑での収穫から作るまで本物の体験をするようになりつつある。

○小板さん(中部キャラバン顧問)

- ・現場を見て、理解して伝える
- ・学校側は、事前学習をしっかりとすること
- ・最近、私立は海外にも教育旅行に行く

○佐藤さん(国際自然大学校)

- ・うちの場合、90%の学校が旅行代理店を通さずダイレクトにオーダーがくる
- ・6000 人がやっている、けど、最近下火になってきているのでは？
- ・「子どもの居場所」事業も民間が参入しにくくなる

○水野さん(飛騨一之宮グリーン体験宿)

- ・主にプログラム提供、単価は2 千円から 5 千円
- ・体験プログラムへの要望として、無料化のニーズが根強くある
- ・東白川 第三セクターであまりお金をとれない
- ・地元の子どもの体験、生協

○県のポータルサイトの利用について

- ・NPOならすぐに使えるので、どんどん使ってほしい。
- ・入れるべき情報は？
 - 安全についてしっかり書いておく
 - 対応がきちんとできることを明記

→スタッフの教育システム

→事前連絡の窓口

→他県の取り組み（長野の白馬 民宿が多いのが魅力）

- ・岐阜県では、宿泊システムも整える必要がある
- ・携帯電話だけでなく、固定電話の連絡先があることが信頼につながる
- ・表面的でなく、深いページづくりが必要なのでは
- ・参加者の評価、クレームなどが書き込めて対応できること
- ・毎日更新していないと、新鮮さが薄れる
- ・生きているページづくりへの要望

●「SS2 自然と人をつなぐ仕事・ハローネイチャーワーク」分科会（報告：中澤）

- ・リクルートの期待もあってか、盛況だった。22名が参加してくれた。
- ・自然と人をつなぐ仕事がどれくらいあるか？ イベントの案内はよくみるが、現場ではどうなのか、生の声を聞きたい、という声に応える形となった。
- ・最初にゲストから現場の様子をレポートしてもらった（4人のゲスト+ODSS）
- ・つぎに、「自然体験活動フルーツバスケット」で気分転換したあと、ゲストと参加者で質疑応答の時間をとった。



<主な質問と答え>

- ・現場の時間と事務の時間

→1：9から6：4まで

- ・この仕事をはじめたきっかけ、やりがい
- ・おすすめの資格

→特になし、ただProject WILDは即戦力になる

- ・ここがつらいよ！というところ
- ・仕事と家庭の割合

→3：7から8：2まで

- ・苦労話

→公共の施設との関係性、本部と支部の関係性、スタッフのコスト感覚

- ・保護者対策について
- ・財源確保について
- ・今の給料で満足？
- ・理想と現実のギャップ

→NPOであっても利益を取る必要がある。すぐに結果を求められる

- ・やりたいことのために選んだ仕事か？ フィールド優先か？
- ・組織内のぶっちゃけ話は？
- ・求める人材は？

→給料以上の仕事をする人

- ・どれだけの能力を持っていなくてはいけないか？

→プロ意識をもつ、質の高い仕事をして、きちんと対価を得る、質の高いプログラムをつくる必要、きちんとプログラム料をとれるシステム作り

- ・リクルートタイム（合同企業説明会のような感じで）
- ・（参加者の声として）生の情報が聞けてよかった。現場のイメージができた。

●「SS3 地域の自然を行かした食育」分科会（報告：十文字）

○前半は「竹パン焼き」をみんなで体験。計量、こね、発酵、成型、焼いて食べるまでを行なった。パンを焼くためのU字溝の幅がいろいろ違ったりするなどのハプニングもあった。この実際のパンづくりを通して、ご飯を作ることの楽しさ（自分で最初から最後まで出来るチャレンジ）を共有した。



○後半は、まずゲストの小松道代さん（ペンションリトルパイン）が食のプログラムを何のためにどんな思いでやっているのか伺う。

- ・今回（竹焼きパン）の場合、食材の土地との結びつきは薄いですが、子どもひとりひとりが、最初から最後まで自分でかかわれる、美味しい笑顔がみられるからやっている。
- ・こういった取り組みは、地域でむりなく続けることができるシステムが必要

○つぎに、食育と地域社会についてゲスト、担当、参加者のみなさんで話し合い

- ・自分たちの子どもころの話と、今の子どもたちの現状（自然と親しむ、自然の中で遊ぶ機会が減っている）
- ・地域社会が健全なら、「自然体験活動」はあえて行う必要がなくなり、私たちは失業してしまうかも、という意見もあった。

●「SS4 森作り体験」分科会（報告：柴田）

- ・森作りの現場は会場西側に位置する山のかなり上の方。檜の人工林であるが、間伐が放棄されている。
- ・なぜ間伐が必要なのか？ それは、災害防止と木材利用が主な理由。草が生えず、真っ暗な林は、土が流れて山崩れになる。また、木が密集していると曲がったりする。



- ・今回は、3名ずつ3班で間伐を行った。密集していると木がひっかかる。その場合はどうするか、などを考えながら作業を実施。
- ・保育していない山（枝打ち、間伐していない）には手をかける必要がある。岐阜県中の木が、子

育ての出来ていない人工林。大きな問題である。

【夜の体験プログラム】10:25～12:00

●「ハザコ観察」（報告：浅野）

- ・郡上高校 山田先生に案内してもらい、飲酒禁止の中、観察を実施。山田先生はハザコがどこにいるか、何をしているかがわかる、という能力の持ち主。
- ・ハザコが私たちをウェルカム（歓迎）してくれた。現場に行ったらすぐに見られた。彼らは落ち葉に食いついてくる。
- ・「ハザコってなに？」（フロアからの質問）

→オオサンショウウオのこと。オオサンショウウオ（世界最大の両生類）は世界各地にいるが、氷河期の生き残りだろうとのことである



●「火振り漁」（報告：三浦）

- ・民宿を経営する井上さんがゲストに迎え実施。火振り漁では、多い時は一晩で2千匹の鮎がとれることもある。ちなみに、大ぶりの鮎だと1匹2000円はする。
- ・現場では、一人一匹は食べることができた。また、カマツカ（底棲の魚）も食べた
- ・昨日は川霧が出て、長良川の風景に非常に風情があった。
- ・参加者の声は「美味しかった」とひとこと



【体験プログラム】（1日目 13:00～ 2日目 9:00～）

●「カヌー」（報告：赤木）

- ・カヌー体験では、雨に降られなくてもびしょぬれになった。参加者の中には、岩から飛び込んだりもした人もいた。
- ・2日目は、体験プログラムの参加者の半分は地元の小学生だった。彼らは、最初は怖がっていても、最後には十分楽しんでいた。
- ・大人の参加者とは、安全、救助方法についても話した。
- ・技術の習得、川に親しめるきっかけ作りにカヌー体験はつながる。
- ・川から山を見る、目をつぶってゆったり流されるなどが印象的だった。



【2日目分科会】9:00～12:00

●「SS5 子育てと自然体験」分科会（報告：八尾）

○前半はネイチャーゲーム体験、地元の親子もスポット参加してくれた。

- ・自然の宝物をさがそう
- ・カモフラージュ（やまね工房のぬいぐるみを使って）
- ・フィールドビンゴ
- ・わたしのワンピース（絵本）の模様をさがそう（カードと携帯、デジカメをつかう）
- ・こどもの名前を使って詩をつくろう

→色鉛筆でかいた絵はがきの裏にかいてもらってお土産にする）

○後半は、まず前半のネイチャーゲームのプログラムの意図開きを行った。

○次に子育てと自然体験について、ディスカッション

- ・プログラムがあって、自然に行きつけられたものをやっていくのもよいが、子どもがそれをきっかけにして全然違うものを探しはじめたらどうするか？

→子どもたちの自由な行動を促すため、親に「待つ力」をつけてもらう必要もある。

- ・対象によって、内容によってもスタンスが異なる。
- ・参加者は「おかあさんとお子さん」が多いが、お父さんを連れ出すには？

→お父さんにしかできないことをして、ヒーローになってもらう。

→行きたくなくても運転手として来た時に参加してもらう。

- ・ポータルサイトに載せてほしい情報・ほしいもの

→自然体験活動の情報プラス周辺情報（大人が喜ぶツアーのような体験）

→自然を知らないお父さんお母さんでも大丈夫！初心者大歓迎 といううたい文句の自然体験活動の情報

→兄弟で、小さい子がいる場合の託児のシステム

○子育てに困ったら、自然体験をしに岐阜に行こう、と思ってもらえるくらいにしたい。



●「SS6 グリーンツーリズムなんて知らない！」分科会（報告：武藤）

○刺激的なタイトルにひかれた参加者9名（年齢層幅広い（最高年齢差50歳））

○グリーンツーリズムの悩み、問題点、大変なことについて話し合った。

- ・企画する人と受け入れる人の意識のギャップ
- ・主催者側と参加者の違い
- ・民宿同士、参加者の家族の中での意識のギャップ
- ・参加者は「お客様」なのか？



- ・表層だけで終わっている（楽しいところ、面白いところだけ）
- ・地元の人の認識不足
- ・無謀な計画（主催者側の思い込みで詰め込み過ぎ、時間押し）
- ・グリーンツーリズムとはいったいなにか、目的は？
- ・核となる部分があいまいでギャップを生んでいる。

○どうしたらよいか？意識のギャップをどう埋めるか？

- ・サービス産業だが、第一次産業、よその人を受け入れる。
- ・都市側参加者のニーズ、地域のニーズ双方をいれる。

○どのようなかたちが理想？

- ・短時間の原体験ができる。
- ・本物との出会いがあれば、短時間でも満足できるのではないか。
- ・1日村人体験（ありのままの生活）
- ・ファームステイ
- ・長期（半年、一年）家族として体験し、最終的にそこに住みたいと思ってもらう。
- ・田舎で空き家があっても貸してくれない。

→地元の人と仲良くなってもらい関係性を築くこと

○理想に近づけるには？

- ・宣伝、HP、営業で相手のニーズをつかみ、こちらの思いをつたえる。
- ・ポータルサイトなど、ギャップ埋める内容に

●「SS7 森のインタープリテーション」分科会（報告：川尻）

- ・まず、雨が降らなかったのがラッキーだった。
- ・先生方に引き込まれた。小野木先生、小林先生は対照的なお二人で、それぞれの独自のインタープリテーションのスタイルがあった。ただ、針葉樹に到達するまでに話がはずんでしまい、目標だったスギ林でのインタープリテーションにあまりならなかったのは少々残念。



- ・木の見方、木との関わり方などを教えてもらえたのが収穫。例えば、タラの木などは一般にトゲがあると思われているが、南の方では食べる生き物がいないため、トゲがなくなっている。双子葉、単子葉の違い（葉っぱが三つにわかれているなら単子葉）など、調べるために見るポイントなども教えていただいた。
- ・自分たちの勉強にもなったし、他の方に伝えるにも必要なことを知ることができた。（小野木先生は演歌、五七五、だじゃれが欠かせないとおっしゃっていた）

●「SS8 ものづくり商店街」分科会（報告：小木曾）



- ・あんどん作り（行灯工房 入江さん）、オカリナ作り（エヌエスネット 浅野さん）、箸作り（森林たくみ塾 小木曾さん）をやった。すべて木という素材を使ってつくるクラフトだった。
- ・いずれのプログラムも、雨プロとしてだけでなく、プログラムの中のアクティビティとして積極的に取り入れたり、伝えるためのツールとして使えるものだった。
- ・キットの開発、他の団体にひろめる、など、他とのつながり、情報の共有が大切。
- ・下からのあかりのよさ（直接照明の上からの光より、和ろうそくで下から上へ照らすあかりのあたたかさ）

【全体会】 13:00～15:00

司会 高田研（岐阜県立森林文化アカデミー）

<分科会報告>

各分科会コーディネーター



<パネル・ディスカッション>

●ポータルサイトを実際にたちあげよう

三島：ポータルサイト自身が、都市の論理でつくられるのではなく、暮らしているもの、暮らしている姿をあらわすサイトであらねばならない。

八尾：「岐阜県」を意識したい。自然体験というキーワードを通じてサポートできる人がいる。少子高齢化など社会問題も解決できるサイト。岐阜県全体の魅力を上げるサイトがいい。

中澤：現場の生の話を知りたいというニーズは強い。働いている人の人となりが見えるものがあるといい。

北川：発信側としてどういう情報を発信したらよいか。活動自身が魅力的なら、活動している人の日記風なものなどもよい。バーチャルのなかから、本物の体験をしたい、と思ってもらえるように。活動を知ってもらう、生き生きとした情報発信を。

加藤：行く途中の温泉、お食事どころなどをそれぞれ紹介するのではなく、ポータルサイトでつなげる、ツアーとしての紹介を。デジタルな、無味乾燥なものでなく、「自然素材」の「料理」をレシピ、絵ではなく、どう伝えるかがヒントになるのでは？

浅見：小学校PTAで自分が自然体験していないお母さんなどと話すと、「いいわね、でも、こどもは忙しいんです」「下の子が小さいから」「上の子が忙しい」などの声が多い。勧めても、はじめの一步が出ない、でも潜在的には行きたいと思っている方が多いと実感している。

三島：「里帰り」のイメージ。非日常の中で、日常をいったんリセットして見直す。あれもこれも必要だけど、比較ではなく一から考え直す（労働、暮らし、仲間など）



十文字：実際に作る段階になったら、どんな人を具体的にイメージしているか？

北川：県のポータルサイトなら、すぐにできることがある。文部科学省の助成のことも考慮。取材する、サイトに書き込む、全体をコーディネートできる、といった人材が必要

中澤：あまりかかわっていない人の体験談もほしい。

八尾：検索機能の充実。ポータルサイトなのだから、あくまで入口機能。ニュースが出ているといい。簡単だけどセンスがいいものを。その奥（リンク先）は各団体で工夫を。

三島：低賃金で長時間務められる人。人のことに興味がある人。自分のいいたいことをいうのではなく、目の前の人のいいところ、いろんな場所のよいところをみつけられる人。

<閉会式>

●閉会の言葉（北川）

- ・MLにもぜひ加わってほしい。黙ってみていても、時々意見を書いてもよい。実行委員会は毎月第一月曜日6時から、森林文化アカデミーで行っているので、どなたでも参加してください。
- ・ポータルサイトにむけて準備、予算をがっちりつかんで、30団体のひとつになりたい。どうせ作るならいいもの、ちゃんとしたもの、信用できるページ、背伸びをしていないページ作りをめざしたい。
- ・この会の基本は出会って語って集って、風通しがよくなる、お互いよく知り合うこと。さらに魅力的な岐阜県の自然体験活動をめざしていきたい。

